

旅人「たちの素顔」

ある日、新しい扉を押し、「旅人」になった。幸せと思っていた人生への疑問、まだうまくまとまらない夢、自分らしさの回復。潮風と段々畑に抱かれて、ミカンアルバイトたちは心の奥をのぞき込む。



11月の風をほおに、宇和海の水平線を眺める黄金井

貧しくてもシンプル、アジアの旅で生き方が変わった。

夕

「街は最高だぜっといふれる町だよ。黄金井英一。芸能人なんかと会ったりは、ここ日本を歩いたり来たりしながら暮らしている。妻33、長男30の3人家族。パイの家は山岳民族に手伝わしてもらって建てた高床式の竹の家。電気も水道もない。家のある2・6秒の「村」には、かにも日本人家族2世帯とタイ人の計7人が住む。村長の「とろん」は60歳前後の細身の日本人男性。白いものが交じるひげ、ドレッドヘア。この「衝撃的なおじさん」の出会いが黄金井の生き方を変えた。生まれ育った静岡県を離れ、18歳で東京に出た。原宿のラーメン店で働きながらクラブで夜遊び。DJもやった。



パイで友人の日本人男性と茶を飲む黄金井(右) 時間がゆったり流れる

焦らずゆっくり、大丈夫

旅へ。自由気ままと言えども、奥にいつもおびえに似た気持ちもあった。こんな世間的にはおかし。働かなきゃいけない。1年して、今後の金はどうする。パイで出会ったとろんは、そんな思いを一気に吹き飛ばした。世界を旅した筋金入りの自由人。「大丈夫」が口癖。彼の意味あふれる笑顔を見て「ああ、自分の好きなように生きていいんだ。恐れていたのは妄想だったんだと思った」。2005年、とろんの村で暮らし始めた。長く交際していた女性と結婚。子どもも生まれた。村では太陽と一緒に寝起きする。家具、食器や服などは手作り。山岳民族の教え通りバナナの本の下を掘ると水が湧き、井戸も完成した。米や野菜も育てた。時々、近くの川に自噴する温泉に家族で遊びに行く。ただ子どもを学校に行かせるため、いずれは日本に居を定める予定だ。「義務教育に疑問がないわけではないけど、子どもには子どもの人生がある。それに日本の地方には、まだきれいな暮らしが残っている気がする」と。

Voice えひめ

真穴地区ミカン アルバイター事業

1994年、高齢化による人手不足を背景に、都市部の若者を働き手として活用する仕組みに産地PRや後継者探しを図ると、地元農家などから「みかんの雇用促進協議会」が、八幡浜市の補助を受けてスタートさせた。

12月下旬、勤務先の家庭や共同選果場に住民込み、収穫や選果に従事する。初年度は32人だった受け入れ人も徐々に増え、2009年は42戸に分かれて96人が働いた。年齢層は10〜40代、平均年齢は29歳。アルバイト経験者からの紹介や、東京・大

阪で行う面接により選考する。勤務時間は午前7時半〜午後4時で、コンテナの運搬などの力作業もある場合は日給7千円、収穫や選果のみなら同5千円。選果作業には残業もある。雨天で作業できない場合や選果場休業日を除き、休日は原則ない。